

NETWORK

- 住宅も不動産価値から生活サービス追求型へ
- 人の流動化が減り、空家がふえる場合の住宅需要は 2
- お寺の本堂で聞くジャズの音もなかなかオツなもんだ 4
- 地域ニーズに応える大学 6
- クチコミで広がり、今年年間 200 万人が参拝
- －昭和以降の高塚愛宕地蔵尊の変遷をみる－ 8
- 都市近郊でのゆとりある生活を実現するために 10

見・聞・食

- 空店舗活用が商店街の流れを変えるか？
- －通りからにぎわいのある人だまりへ－ 11
- 地元と密接に関わっている博多バレイン
- 福岡市下川端地区再開発ビル建設工事現場見学会 13
- ホントのホントの地底体験
- ～黒川坑見学会に参加して 14
- まつりの企画はむずかしい!? 八女福島の町屋まつり 15
- あなたの家を節水型住宅にしませんか
- －福岡県節水型住宅のお知らせ－ 16
- －長崎街道が今に生きる－
- 歴史資源を生かして長続きする活動のベースに 16

近況

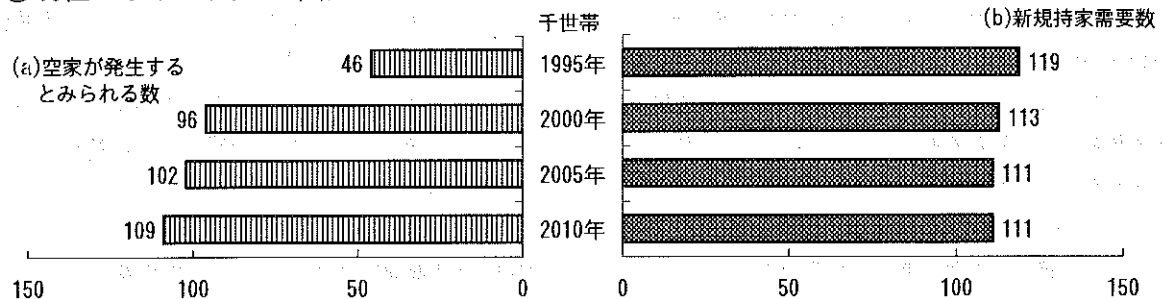
- 蕎麦の花を見ながら考えた ～百姓志願願末記・糸乗貞喜～ 17
- 事務所近辺の天神・博多散歩 水鏡天満宮の扁額 20

本・BOOKS

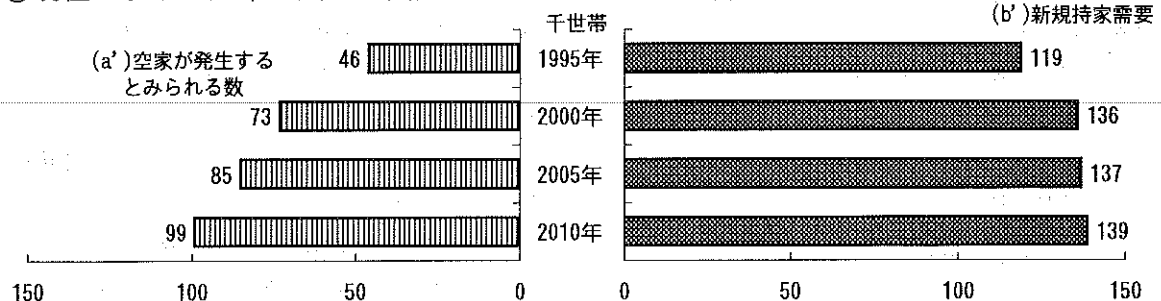
- だったん疾風録 21
- 「山羊と暮らした」 22

○新規持家需要と空家のインパクト (福岡県の年齢層別持家世帯数の推計、「国勢調査」)

①現在のままで人口の出入りがなくなると考えたとき



②現在のような比率で人口の出入りが続くと考えた場合



上図は福岡県の年齢別の持家世帯数の推移(国勢調査より)を推計したものである。増加分を新規持家需要、減少分を空家発生数としてみた。また、ベースとなる人口の推計は、①現在のような社会移動(人口の流入)がそう続かないとき、②現在のような社会移動が今後も続くとした場合の予測である。なお、全ての空家が需要圧迫要因になるとはいえないと考える。(2頁に関連記事)

単位: 千世帯

年	1990	2000	2005	2010
①-(a)	46	96	102	109
①-(b)	119	113	111	111
②-(a')	46	73	85	99
②-(b')	119	136	137	139

資料: 国勢調査

住宅も不動産価値から生活サービス追求型へ 人の流動化がへり空家がふえる場合の住宅需要

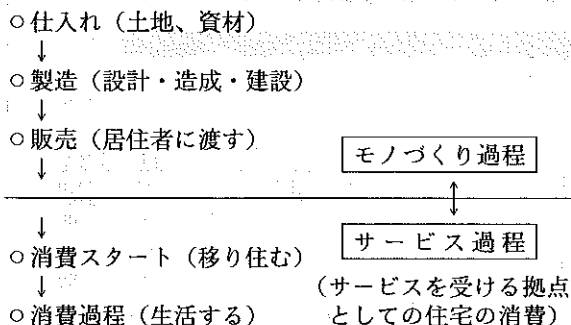
福岡市周辺の戸建て住宅団地にも空家が目立ち始めている。高齢者の移動も増えている。その移動した跡は空家になっている。このことについては、当所の研究報告「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」で述べている。そこでも云われたが、歳を取るほど移動率が高くなっているのである。これを見ながら、●空家はどれくらいあるのか、●空家にいつどれくらい、どんな年齢層の人たちから発生するのか、●住宅需要数と空家数の関係はどうなるのか、●空家を活用できれば新規建設はいらないというようなことにならないか、●需要が逼迫した時にでも売れる宅地や住宅はないのか、などが気になった。そのために、○モノづくり型住宅供給の仕組みと問題点、○住宅の消費過程のポイント、○新規持家需要の推定と空家の発生予測、○住宅も使用価値重視・サービス業の時代へ、など整理してみた。

私たちは、2010年頃までに少しずつ住宅需要が減り、その2010年頃を境にして一層はっきりとした変曲点を迎えると考えている。つまり、住宅をネタとする計画や地域施策は、量的な意味では、2010年までに終わってしまわねばならないということである。

〈モノづくり型住宅供給の仕組みと問題点〉

住宅という商品の製造・販売・消費の過程の中では、卸産業というものがほとんど存在しないと考えてよい。それは流通という言葉の意味での流れること、つまり商品移動がほとんど不可能だということからきている。

住宅や宅地の生産から消費に到るプロセスを示すと次のようになる。



前半のモノづくり過程について考えてみると、資材はともかく、土地は全く移動性がない。資材も、住宅として完成した暁には、全く流通ルートが固定される。購買客の範囲に限定されるのである。だからそもそも、持家住宅は注文生産であったり、近所の協力を得た共同建設であった。

また、住宅が完成すると同時に、用地費と建設費に対する借入金金利、建物の減価償却が始まる。住宅物件に対する経費は毎日増えていくのに、住宅そのものは減価し続ける。つまり、住宅産業にとっては、構造的にみて、在庫は諸悪の根元である。

右肩上がりの時代には、上記の原則は、物価や所得の上昇によってカバーされたが、今では本来の原則に戻ってしまっている。

「合理的なモノづくりとは」という点で考えてみると、これは正にフォードシステムで始まった自動車生産に似たものになるだろう。住宅とはいっても①大量仕入れ(土地・資材)、②大量生産、③事業期間の短縮(製造のスピードをあげる)、④短期大量販売、ということになる。しかし、この生産が成り立つためには、大規模需要が短期に想定されねばならない。

今は住宅製造にとって、どんな時期なのであろうか。

〈住宅の消費過程のポイントは、高品質な地域サービスシステム〉

住宅が購入されて、消費過程にはいると、消費者(居住者)の関心は、①住み続けやすい土地柄、②暮らしやすさ(生活サービス)、③近隣との交際しやすさ、④地域に活力がある、などに移る。

住宅に限らず、建築物をつくるときよく「建築家は竣工式のためだけの設計をするから、その日の格好が良いことをねらった設計をする。竣工後入居する人の使い勝手や、利用者の不便などは考えていない」などということが言われている。確かに、市民会館などは、発注者である市長さんや、設計をする建築家は、今後長期にわたってその会館などに関わることは少ない。

住宅の場合も、苦情の理由は、今まで消費者が注文建築の住宅を除いては、長期の利用(滞在)を前提と

しなかったからではなかろうか。つまり、耐久消費財（数十年から多世代にわたる）でありながら、買替需要という言葉が示すように、耐久消費はしないことを前提に買われたり、売られたりしてきている。

今後住宅が買い手市場になると、一層、モノとしての見てくれより、消費過程の安定性や生活環境の比重が大きくなるに違いない。

では、供給と消費の内容はどうなっていくのであろうか。

〈新規持家需要の推定と空家の発生予測〉

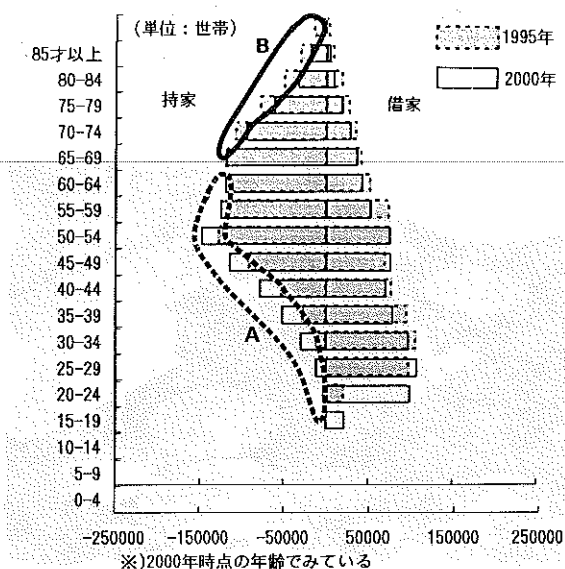
新規持家需要は、持家世帯主の増加数を推計することで求め、新規空家の発生は、持家世帯主が加齢にともない、持家から離れる数を求めることで推定した。また、年齢階層毎の持家比率は90年、95年でもそれほど変わっていないことに着目して、将来の持家需要を求めることにした。手順は下記の通りである。

$$\begin{aligned} & (\text{将来の年齢階層別人口}) \times (\text{95年の持家比率}) \\ & = \text{年齢階層別持家数} \end{aligned}$$

空家については既存のものもあるが、今回は、持家が新しく空家化することのみで考えることにした。

$$\begin{aligned} & (\text{ある年の年齢別持家世帯数}) - (\text{5年経過した時の同じ人達の持家世帯数}) = (\text{マイナスの場合を加齢による空家化とみた}) \end{aligned}$$

例えば福岡県の、1990年の75～79歳の持家世帯は41,969であったが、5年後、80～84歳の時の持家世帯は29,834になっており、この差は12,135となる。これは5年間に死亡もしくは移転などによって、持家から離れたものと推定した。この数値を空家の発生とみな



したのである。

以上の方法で福岡県の●5年毎の持家需要数の推計、●5年毎の空家数の発生、●持家増加のプラス要因と、空家増加のマイナス要因の比較をみた。

①年齢階層毎の持家数を5年ずらして考えた

○図に示したAの部分新しい持家需要とする。

○Bの部分は死亡や移転などの要因による空家発生数と考えた。

②新規持家需要(新しい持家必要数)－図のA

現在のように、社会移動が続く場合(社会移動趨勢型)と、そう続かない場合(社会移動閉鎖型)の新規持家需要予測をしてみた。

(千世帯)

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
趨勢型	119	136	137	139	138	134
閉鎖型	119	113	111	111	109	103

③空家数(空家が発生するとみられる数)－図のB

②と同様に2つの型で空家数の予測をしてみた。

(千世帯)

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
趨勢型	46	73	85	99	111	123
閉鎖型	46	96	102	109	115	121

④持家需要から空家の発生数を引いてみた

(②持家需要)－(③空家)

(千世帯)

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
趨勢型	73	63	52	40	27	11
閉鎖型	73	17	10	2	-4	-21

⑤持家需要から空家の発生数の1/2を引いてみた

(②持家需要)－(③空家/2)

(千世帯)

	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
趨勢型	96	100	95	90	82	72
閉鎖型	96	65	61	57	54	40

上記は新規の持家需要から新しく発生するとみられる空家数を差し引いたもの④と、空家のすべてがマイナス側にまわることはないで、その1/2をマイナスの影響とと考えて差し引いたもの⑤を表している。例えば、④の閉鎖型の場合は、2000年以降、17、10、2、-4、-21となり、⑤の閉鎖型の場合には、65、61、57、54、40となる。こういった条件を加味して考えると、今後、住宅需要が大量に発生することは見込

めないため、現在のように住宅を大規模に開発し瞬間的に供給するやり方は無理だと考える。また、人口流動がおさまる傾向からも、消費者のニーズにも合わなくなってくる。

〈住宅も使用価値重視、サービス業の時代へ〉

今や、日本全体が人口増加しない時代に入っている。その中で、移動のきかない住宅という商品は、人々の都市への集中という前提条件での、大量の見込生産ということは難しくなっている。

一方、住宅需要を減らす要因となる空家圧力が強まっている。上に述べたように、2010年から2020年頃には数の上では新規需要を追いこすかもしれない。もちろん空家となる住宅すべてが、次の利用にまわることはないであろうから、住宅建設の必要性がなくなることはない。今まで述べてきたことを2010年についてまとめると、次のようになる。

①今後も福岡県に今と同様に人口流入が続くとした場合、新規住宅需要と空家発生数の差はプラス（需要

が大）となる。

②人口流入がなくなって現状維持程度となると、新規需要と空家発生数はトントンとなる。

③空家の半分が再利用に回ることとすると、①の場合は、新規需要3分の1ぐらいカットされる。

④②の場合には空家の半分が再利用に回ると需要は2分の1カットされる。

⑤④の場合の持家需要は、現在のおおよそ1/2である。

2010年頃の住宅ニードは、イ）メインテナンスを含むサービス重視、ロ）生活サービスの充実した生活環境重視、ハ）住宅は、売って住み替えていく不動産ではなく生活基盤となる、ニ）自分の生活スタイルを考えて住宅を選ぶ、ホ）その生活スタイルは、どのような人たちとどのような生き方のネットワークを結ぶかという生活感で決まる、というようなことになってこよう。結局のところ、住宅は不動産コロガシから脱して、生活サービス業の方向になっていかねばならない。

（糸乗 貞喜、澤谷 真紀子）

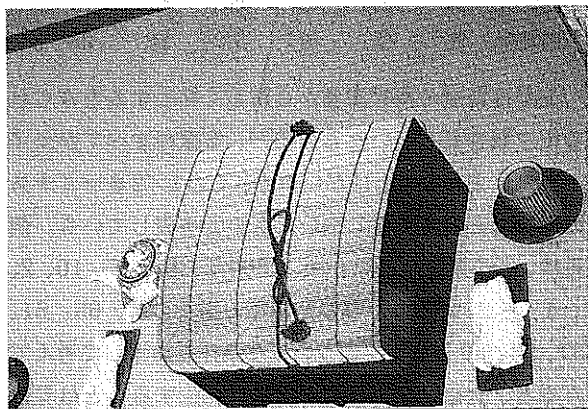
お寺の本堂で聞くジャズの音も

なかなかオツなもんだ

■私のまちの誇れるものってなんだ？

私の住むまち（福岡市近郊のベッドタウン）では、最近新設した文化ホールで、誰それ先生の講演会、著名な音楽家の公演会、名画の上映会を頻繁に行うことで文化活動を盛んにやっていると自負しているようだ。

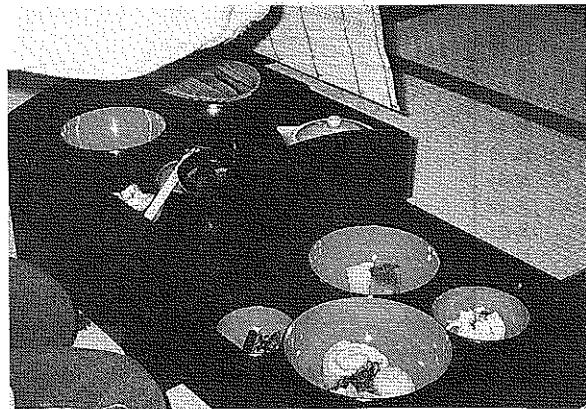
簾をはずすと上の段、下を引き出すと下の段の
ごちそうが出てくる



私も何度か行ってみて、毎回お金を払ってその場限りのスッキリ感を味わうのだが、これは単なる消費であって、家でテレビを見ると気分的にさほど変わりがないことに気づいた。ここは、昔の筑紫のクニでもあったから、有史以来の歴史も古く、社寺や史跡などそれなりの含蓄のある資源は多いのだが、地元で親しまれるのは年末年始の詣の時くらい。しかも、行ってみて、自分の心に残るような思い出、特に気分良く過ごしてお金を払ったという思い出はない。

よその人に自慢できて、お客さんが来たときに連れ

結構ごうせいなごちそうであった





本日のメインはSLEEPY & IINO。彼らは金色に輝く御本尊にみつめられて、上手く観客をノセていた。たくさんの人たちの左手がご本尊、右手のところで演奏した

ていけるだけの存在感があり、さらに自分でも味わって楽しめる、そして何度行ってもお金はさほどかからない、こういう地域に根付いたしっとりしたものができないものかとも思っていた。

そんな折、当社の系乗のもとに、彫刻家の田村務さんから誘いがあり、下関の長府にある功山寺で、9月23日に開催されたジャズのライブに行ってみた。

■歴史を感じさせるお寺で知名度は一応全国区

功山寺は鎌倉幕府の時代に、守護職が長府に置かれた折に建てられた、純唐様式の禅宗建築の大きなお寺である。江戸時代、幕末に都落ちした七卿が長州藩に保護されて潜居していた場所でもあり、藩政府を相手に挙兵した高杉晋作が、七卿に暇乞いに訪れたことで知られる。そういう歴史の舞台としてここを訪れる人は全国から来ている。

長府の歴史は功山寺より古く、古事記や日本書記などにその地名は登場する。後年は武家屋敷や土の練塀の街並みが形成されて、今もその姿を残している。

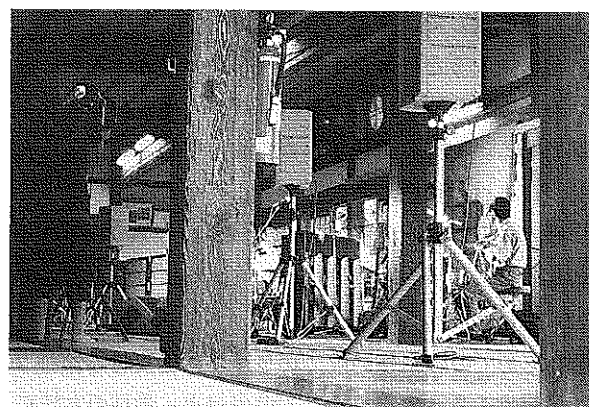
出かける前に「るぶ」で下調べすると功山寺では、精進料理や粥御膳などが楽しめるという。

最近、食事やサービスなど、お寺における気分の良い時間の過ごし方について研究しはじめていた私たちは、夕方から始まるライブの前から行って、食事をとることにした。

■粥御膳は五観之偈ではじまる

神社に入る際、階段下に止めてあった車のナンバーは、ほとんどが山口ナンバーであり、普通の休みの日には地元の来訪者が多いようだ。

食事は本殿の横の建物に上がっていただく。仲居さ



準備中の様子、柱の大きさが本堂らしい雰囲気をかもし出している

んがやってきて、まずはお茶とお菓子をどうぞということになって、粥御膳とお酒を注文した。

10分ほどで運ばれてきた粥御膳は、簾をかぶせた二段の箱膳で、箸入れには五観之偈（ごかんのげ）が記してあった。

料理を運んでくれた仲居さんはお寺の作務衣を着ていたが、聞いてみると、料理のサービスはお寺の直営ではなく、精進料理のお店がやっているとのこと。場所だけお寺を使わせてもらっているのかもしれない。

上品なダシがきいた薄味の惣菜がおいしい。粥御膳にお酒一合をつけて、一人3,000円だから納得できる。

手入れされた苔の庭が見事で、下駄をつっかけてそぞろ歩きしてみた。同じ棟の建物を歩いていくと、七卿潜居の間という部屋もあった。建物は本殿に直結しており、ちょうど夜のライブに向けて機材搬入をしている最中である。袈裟姿のお坊さんが、今日のイベント主催者と熱心にスピーカーの位置を打ち合っている。

■手作りイベントだが、客さばきはきちんとしたシステムだ

夕方になって、本堂の真裏（真西）に陽が落ちると、丘の上の功山寺の境内に人が三々五々と登ってきた。客層は様々だが、親子連れ、高齢者グループなど地元の人が多い（水筒やお菓子を持ち込む人が多い）。

受付のところで田村さんが我々を待っていた。結構、客の入りが良いということで満足そうである。

受付は地元のボランティア組織「こどもの広場」が担当し、子供達もチケットもぎりに加わっている。靴入れとしてビニール袋が各自に手渡される。

車椅子で参加している男性には屈強そうな男性2〜3

名が手を貸している。

会場に入ると私はまず蚊に刺された。人いきれに蚊が寄せられたのか、方々でぼりぼりと掻きむしる音も聞こえる。主催者側はすかさず蚊とり線香数十本に火をつけるべく用意した。

靴入れのビニール袋といい線香といい、100%手作りの集まりながら、客さばきのシステムはきちんとしていた点に感心した。

■はじめての御本尊の前でのライブに出演者も緊張？

来場者をざっと数えると150名ほど。受付の女性に客層を聞いてみた。「地元（下関）の人が7割位で一番多いけれど、あとは九州や近畿からも来ています」とのこと。みなさん本殿の畳の間に車座に座り、受付で配給されたビールを飲んで談話している。

間もなくステージというときに、寺の若い僧が頭をかきながら「どうかビールだけはこぼさんといて下さい。シミができればクビになりますんで……」と会場に呼びかけて、これで会場はすっかり和んだ雰囲気になった。

ステージの始まりには、バンドのボーカル氏も「今日のステージは変わったところだと聞いてはいましたが、なにしろ御本尊の目の前で歌をやるのははじめてで少々緊張を……」と恐縮。

それでも駆けつけているファンがうまくのせて、地元の下関の4人組みとのセッションも無事にこなせたようだ。お寺の本殿でジャズをやるとギターやハーモニカといった楽器の音響が意外に良いということに気づいた。音がこもらないため、高音も割れず、低音も明瞭に聞こえるのである。

■結局「おはなし」になる良いコトに、人が大勢集まっている

帰り間際に田村さんの紹介で、福岡からやってきた意外な人に会うことができた。一人は有田焼の窯元の方で岱山窯（福岡県須恵町）の倉島さん、萬代酒造（福岡県宇美町）の小林社長。倉島さんは、以前、当社のパーティーに参加されたこともあるのだが、功山寺のお坊さんで有田出身の人がいるため、この日やって来たという。小林社長は「五脚（七脚がのちに五脚に）が太宰府に潜居していた折、うちのお酒をごひいきにしてください……」などとおっしゃる。こうしたコブレ話を人を通じて聞くのも、こういう機会ならではのという感じで面白い。

この日のライブが、功山寺のもつ歴史の蓄積、もて

なし、土地や人のつながりなどを結びつけて、いろんな人の心に残る体験を残してくれたように思う。

■一回こっきり型から知的交流型へ、地域文化活動の展開を

始めの話にもどりたい。やはり地域内の身内の人にとっても外部の人にとっても、思い出となり記憶に残るものが、地域の文化活動として蓄積されるようになるのではなからうか。

下関市そのものは人口減少がつづく中、功山寺はそんなことに関係なく、歴史の蓄積を活かしながら、ジャズを通じて様々な人を呼びつけて、新しい人々の交流のきっかけを生んでいる。本来、社寺がもっている地域の文化交流拠点としての役割は、ここではまだ存分に生きている。

一回限りのワンウェイの完全消費型の活動でなく、人が喜んで噂してくれるような知的交流型の活動が地域活力のもとになると思った。（尾崎 正利）

地域ニーズに応える大学

アジアス九州（九州北部学術研究都市）は、昭和63年度（1988年度）の基礎調査から始まり、当初は福岡県の構想だったものから、佐賀県と共同のプロジェクトとなり、福岡県と佐賀県にまたがる7つの拠点地域が連携しながら進められている。それぞれの地域にある大学や研究機関、企業が得意とする分野をより強めるための基盤づくり、地域振興を図るための産学研プロジェクトを創出し、新産業創造を推進することによって、より地域の得意分野を拡大し、九州北部地域から九州さらに、アジアへと展開していくことを目標として進められている。

このプロジェクトは、筑波研究学園都市、関西文化学術研究都市に次ぐ、新しいコンセプトの研究学園都市づくりであり、ハコモノ主義から「コトおこし」への転換というコンセプトであり、各地域の既存集積が、それぞれの得意な分野で首都、本山といえるだけの機能なり、水準を持つことによって、世界に通用する九州となることをめざしている。

■コトおこしの中核が必要

福岡県には、このコトおこしの中核といえる「福岡県産業・科学技術振興財団（IST）」があり、国等の研究ファンドを導入して様々な研究プロジェクトを展開

している。ここ以外にも、いくつかの拠点地域においてこれと類似した機能が存在する。コトおこしには、こういう中核的な機能が不可欠であり、人や情報をコーディネートし、交流や連携をサポートすることによって、コトおこしの芽を出し、育て、花を開かせるというシナリオづくりと演出をする機能が必要である。

■未だハコしか見えない

これら実際の活動に関わっている人たちや、当初からこのプロジェクトに関わってきた大学や企業の研究者、あるいは行政関係者においては、このプロジェクトへの理解はあるものの、一般の人たちにとっては、わかりにくいプロジェクトとよく言われる。このことは、今だに目に見えるもの、つまりハコは何かということにしか関心がないということであり、コトおこしの結果が目に見えるモノ（ハコではない）となることがやはり必要と思われる。

■大学は地域に近づいたか

最近、大学の研究・技術シーズを地域との連携によって活用し、新しいマーケットを創出しようという新産業づくりが盛んになっている。東大の先生たちで作った特許の産業技術化のための会社や、国の技術移転支援機関設置などがこの動きを象徴している。

しかし、こういう大学の研究成果の産業化、つまりは地域への還元という動きはあるものの、新産業づくりの仕事や共同研究プロジェクトおこしなどの手伝いをしている中で感じるのは、まだまだ大学研究者の中には、自分の研究成果を地元で受け入れるだけの企業が無いとか、研究を分かってくれる企業が無いとかいうことを言う人も多く、これを最大の理由として地域とのつながりを取壊して作ろうとしない人もいる。

これは、にわとりとたまごの問題に似ているとも思うが、大学の研究者が自ら変わる意思を持たないことには、地域との新しい関係は今後も築けないのではないかということと、成功例を目に見えるものにすることが必要なのだと感じる。

■地域を大事にする大学に今後は期待を

アジアス九州の仕事の一環として、3年前から、佐賀大学、佐賀県、研究機関と共同で、地域に根ざした技術開発のテーマづくりを進めている。

ご存じのように、佐賀県には有田・伊万里・唐津をはじめとする陶磁器産業、佐賀平野の農業、有明海・玄界灘の水産業など、歴史的、地形的条件による得意な



高さ2メートルのパイプの パイプの中の赤貝殻
中に貝殻が入っている

産業、技術がある。

これらの産業においては、その得意な産業活動を維持していく中で、当然のことながら産業廃棄物が発生する。そこで、生産技術と産業廃棄物の双方を生かした新しい技術開発を追究しようとしている。

その例を2つ紹介したい。

佐賀県南部の有明海は、近年その漁獲量は減少してはいるものの、赤貝の宝庫である。この赤貝を収穫後、流通加工する際に大量の貝殻が廃棄物として産出される。この赤貝殻の特性を利用して、佐賀平野に広がる水路（クリーク）、あるいは河川の水質浄化を目的とした産学協同研究が行われている。

現在は、貝殻をパイプに詰めて、この中を通した汚水がどの程度浄化されるかという実験段階ではあるが、割と良い結果が出ているそうである。佐賀と同様な目的で、牡蠣殻が大量に産出される牡蠣産地などでも水質浄化のためのシステム開発が行われている。

地域によって廃棄物もニーズも異なっているが、問題解決のアプローチ方法はほとんど同じと思う。つまり、その地域にしか出ない廃棄物を活用して、地域の特殊性（地形や地質など）によって起こっている問題を解決するために、地域の大学や企業が持っているそれぞれの知恵やノウハウを出し合い、大学の研究者、地元の企業、公設試・行政などがそれぞれの役割のもとで開発を行うというシステムにおいて、大学はその中心的な役割が期待される。

■地域ならではの研究は全国に通用する

もう一つの例は、佐賀県有田、伊万里、唐津などの陶磁器産地の持つ焼成技術と、佐賀平野で排出される農業廃棄物であるもみ殻を再利用した新しいセラミックスの創出と、このセラミックスに微生物の利用技術（佐賀県は酒造りでも有名）を応用して、新たな廃水浄化処理方法を開発し、この方法で地域の酒造メーカー

や農水産品加工業などから出る廃水処理問題を解決するというすべて佐賀ならではの技術開発テーマであり、応用によっていろいろな産業や地域の問題解決へ貢献することが可能と思われる。

地方の大学であり、規模もそれほど大きくない佐賀大学のこういう動きは、地域の企業、行政との関係づくりを積極的に進めることによって、21世紀での生き残りを賭けているとも見れるし、地域の大学として当たり前前々々をされているとも言える。

しかし、大学という機関の敷居は、大学自らが作ったものであり、その高さを低くする責任も大学にあるのであり、すでに佐賀大学はその敷居を低くしようという努力をしている。

結果的に、よりよい地域社会への発展のため地元の産業と協働して行う研究は、いろいろな地域が抱える問題の解決へも貢献するであろうし、それはさらにアジア地域が将来有するであろう問題の解決にもいずれはつながるであろう。当然、これらの知恵を生み出すもとには基礎研究が必要であり、大学の研究活動においては、これらは車の両輪であり、両方をバランスよくおこなっている研究者が、地域の知的財産となりうる人たちではないだろうか。(山辺真一)

クチコミで広がり、今年年間200万人が参拝

—昭和以降の高塚愛宕地蔵尊の変遷をみる—

十数年前、筑豊地域のある町の振興計画策定での地元懇談会の席であったかと思うが、ある方が「高塚さんみたいなものをつくれば、お客さんがたくさん来るのではないかと」冗談半分で言っていた。この時は、小生も天ヶ瀬付近に高塚地蔵尊なるものがあって、何故かしらお客さんが多いという噂を聞いていたが、実際に見ていないかったため、高塚地蔵さんの雰囲気やどの程度のお客さんが来ているのかのイメージがなかったので、その会話は弾むことなく、途切れてしまったような気がする。

それ以後、気になりながらも時が過ぎ、4年前に初めて高塚地蔵を訪れ、この地の何とも知れない雰囲気の魅力を感じてしまった。拝殿所までの石段の参道沿いには野菜、手作りの味噌、漬物などの土地の産物を置いている出店やお土産売場があり、また頂上部には背後の擁壁の壇上に参拝者奉納の仏様がところ狭しと置

かれ、本堂周りの壁には無数の祈願書が貼られており、その雑然とした雰囲気、その魅力を創り出しているようだ。高塚地蔵の観光客は観光動向調査によると平成9年度で約220万人、10年前の昭和63年には約205万人となっており、ここ10年間は安定しているようである。観光客200万人というとスペースワールドと匹敵する数値である。

それから4年を経過した今回、何故、この地でこのように多くの参拝者が来るようになったのかを知りたくなり、社務所や社会教育指導員の方にお話を伺った。

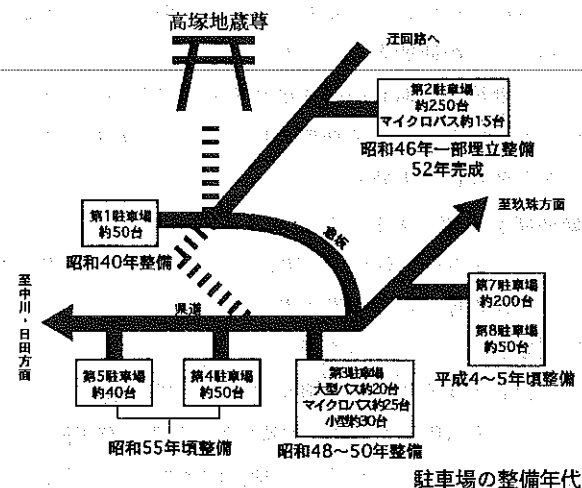
高塚愛宕地蔵尊について

天曆6年(952年)里人たちが、全国行脚中の行基が霊夢を感じ、この地で刻んだという地蔵菩薩を安置して、一堂を建立したのが開基とされる。

古来、「乳地蔵」として広く信仰を集め、境内にそびえる銀杏の老雌株は、行基の霊夢が示現した霊木とされる。母乳の出の悪い婦人が、自分の年の数だけ乳首の布をつくって銀杏の木にかけて祈願すると、乳の出が良くなると信じられてきた。近年は諸願成就の霊験ある(郷土資料事典:大分県版より抜粋)

■口コミと交通機関の発達、参拝客増加に弾みをつける

社務所の方に参拝者が多くなったのはいつ頃で、そのきっかけは何であったのかを尋ねると「私にも良く分からないが、昔から筑後地方の人の信仰が熱く、私の小さいことから“月一詣で”といって、月に一度参拝するような地域もあり、口コミで徐々に広がっていったようだ。」ということで、これといった理由はないようであった。そこで、公民館内の図書室に関係資料を探しに行くと、偶然にも社会教育指導員の方がいら



○昭和9年に久大本線全線開通

- ・これで筑後地方からの参拝者が一挙に増えた

○昭和16年に境内拡張とお堂を上にあげる。

参道改修

- ・戦時中は、出兵兵士の無事を祈願する参拝者が多かった。

○昭和33年にJR豊後中川駅と高塚地蔵との日田バスの定期路線開通

- ・この時期には定期バスを出してもよい程度に参拝者が来ていた。

○昭和40年に第1駐車場の整備

○昭和46年に第2駐車場の一部埋立工事開始

- ・この当時の駐車場は第1、第2とも畑地を整地した程度のものであった。

○昭和48年から50年に第3駐車場整備

○昭和55年頃第4～5駐車場整備

- ・この時期には1.5世帯に1台の乗用車所有となり、車での移動が本格化

- ・この頃、行楽日には交通渋滞を招いていた

- ・昭和53年（最初）の観光動向調査による観光客数は既に約157万人

- ・この頃、バス会社が観光コースに組み入れる

○平成4～5年頃第7、8駐車場整備

- ・平成7年11月に大分自動車道が全線開通し、さらに時間距離は短くなる。

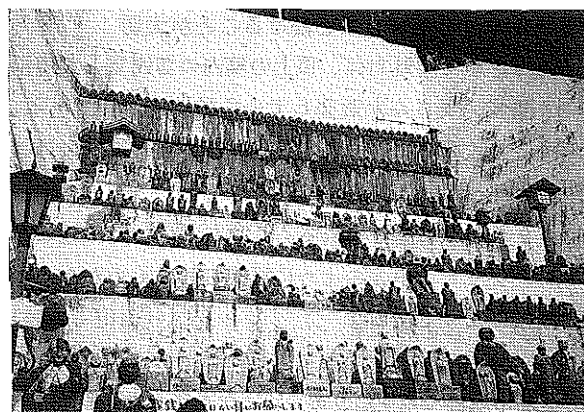
- ・駐車場台数は約700台で、正月は渋滞するそう

っしやったので同じ質問をすると「古くから地域の信仰が強いというのもあるが、交通機関との発達が影響しているのでしょう」という答えが返ってきた。やはり、交通機関や団体旅行などの発達との関連が参拝客増加に弾みをつけたのであろうと推察され、交通機関の変遷を丹念に説明していただいた。また、駐車場の整備の変遷が、そのまま参拝者増加とつながっているらしい。

■高塚地蔵でのお店は自然発生型で60～70店に

社務所の方に、参道沿い及び駐車場回りのお店の数はどのくらいかを尋ねると「大小入れて、70～80店舗ぐらいですかね」という曖昧な返事であった。帰るときに店を数えながら降りていくと、駐車場周辺まで入れて、ほぼ70店舗（石段沿いに並ぶ農産物売場も含む）ぐらいであった。

参道の雰囲気を作っている農産物販売所は、30店舗あり、代々、この高塚地蔵の氏子さんたちが中心となって営業しているとのことであった。当初は昭和45年



擁壁に並べられた仏像（写真上）と
石段沿いにある農産物売場（写真下）

頃に第1～2駐車場の回りに店を出したのが始まりだそう。今の階段沿いに移ったのは昭和55年頃で、すでに店をはじめて30年経過している。今は2代目がいなかったために数件が空店舗になってきているらしく、街中の既存商店街と同じような悩みが出てきている。場所代を“高塚さん”の方にいくらか支払うようになっており、特に組合組織はなく、全く個人営業である。

■大分自動車道開通によって、滞在時間が短くなる

よく交通条件の悪い観光地では、バイパスなどで交通条件が良くなることによって、宿泊は近くの温泉地になってしまい、泊まり客が減少するというようなことが起こる。高塚さんの場合は、宿泊は近くの天ヶ瀬温泉や原鶴温泉などの温泉地を控えていたため、宿泊客の減少というものは無いものの、社務所の方の話では「高速道路が出来て、お客さんは安定してきたが、滞在時間が短くなってきたようだ。また、最近は景気低迷で財布の紐が固くなっているようだ」とのこと。

高速道路が出来たため、宿泊地がさらに遠方になったこと、他に見て回るところが増えたことなどが滞在時間に影響しているのかも知れない。

■地のモノとサービスを続けることが大切

“高塚さん”の魅力は、頂上の境内の雰囲気と参道沿いの地域の奥さんが販売している地域の産物である。今後、空き店舗に外部資本が入ってきて、地域以外の産物が並べられるようになってくると、ここの魅力は半減するよう感じられる。これからは、この地域のモノとサービスをどのように維持していくのかが大きな課題のようである。(山田 龍雄)

都市近郊でのゆとりある生活を実現するために

「優良田園住宅」セミナー

「優良田園住宅の建設の促進に関する法律」(以下「優良田園住宅法」)が新しくできたが、これについて福岡県都市計画課の吉田須美生係長にお話いただいた。「優良田園住宅法」は、多様化する住宅ニーズの中で田園居住のニーズも高まってきたこと、農山村地域、都市近郊等においては、地域活性化の観点から定住や交流の促進が求められていること、等を背景に制定された。セミナーでは、関連する都市計画的な面も多く含まれた話となった。その概要を紹介したい。

■市街化調整区域では基本方針と地区計画が必要

- ・優良田園住宅とは農山村地域や都市近郊の一戸建て住宅で、敷地面積300㎡以上、建ぺい率30%以下、容積率50%以下、3階建て以下と定義されている。
- ・優良田園住宅の基本イメージは「自然遊住型」「UJターン型」「豊かな退職ライフ型」などが挙げられている。ターゲットは都市計画区域だけではなく、未線引き地域のイメージというわけでもない。
- ・優良田園住宅の認定は地区によって手順に差が出る。

- 都市計画区域外、および都市計画区域内未線引き地域—基本方針を定めれば認定される。線引きされてない地区は大きな問題はない。
- 市街化区域—田園居住には該当しない。
- 市街化調整区域—基本方針を立て、地区整備計画を盛り込んだ地区計画を定めれば認定される

- ・市街化調整区域で地区計画を定める場合、「都市計画タイプ」と「田園居住タイプ」に分けられる。
- ・「都市計画タイプ」は市街化区域の縁辺部で、市街化区域になるのを待っているような区域。ここでは既存の市街化区域までのインフラは整備されている

と考えられ、既存部分との整合性をとる必要がある。ただし、どこまでを整合してると判断するかは、市町村によって差が出る可能性がある。それに対して国は「こういうものは認めない」といった排除型の通達は出さないとやっている。

- ・「田園居住タイプ」は市街化区域から離れ、島のようになっている区域。そこでは基本方針でどんな人が住む地区にするかイメージを作る必要がある。その基本方針に則った地区計画を定めて、開発許可が下りるようにすればよい。

■優良田園住宅は小規模にちょこちょこやっていくのに向いている

- ・地区計画はある程度まとまった地区で立てる必要があるが、優良田園住宅の認定は個別でもよい。
- ・田園居住が成り立たないところでは、基本方針を立てても意味がない。田園居住のイメージをはっきり持ってから基本方針を立てるべき。ただし、基本方針自体はがんじがらめに定める必要はない。
- ・これまでの制度に比べて有利になる点は、セカンドハウスの取得などに住宅金融公庫の割増融資などを受けやすくなるなどが出てくる。
- ・田園居住のイメージで示されている絵は、久山町の集落地区計画でイメージされたものに近い。制度としては、大規模に開発するのではなく、小さくちょこちょこやっていくのに向いている。農村のまちづくりを進める上で、有効に使えばいい。
- ・「優良田園住宅法」は集落地域整備法と似ているが、集落地域整備の方は農水省事業との関連があり、実現しにくかった。優良田園住宅は都市計画法の改正とセットになっており、問題点はかなり解消されている。

■市街化調整区域でも小規模な開発が可能になった。

- ・都市計画法改正の内容を簡単に言うと、市街化調整区域において地区計画を定め、それに即するものは規模の小さなものでも開発許可の対象にする、というもの。今まで20haや5ha以上でないと許可されなかったものが、地区計画を定めれば1haでも良くなる。これは大きなインパクトになると思われる。
- ・地区計画の中で地区整備計画を立て、道路、公園など基盤整備について定めれば、その地区の開発は許可すべきと考えられる。合理的であれば何でもいともいえる。ただし既存の都市計画の内容とバッテ

ィングしてはいけない。

- ・そのほか都市計画法の改正点は、11 類型の特別用途地区を廃止し地域に見合った特別用途を定められるようになること、地方分権に伴い市町村の権限を拡大することである。

■緩和型地区計画は市町村のイニシャチブで

- ・地区計画自体は元々規制上乗せ型で、用途地域内についての建築基準法での規制ではゆるいという場合に住民合意により定めるものだった。その後、再開発地区計画や集落地区計画のような緩和型の地区計画ができた。緩和型地区計画というのは、規制をかける本来の都市計画の考え方に反しており、それが適正かどうかの判断などは市町村のイニシャチブで定めることになる。規制型は住民の申請型、緩和型は市町村の指定型といえる。
- ・地区計画を立てたとしても、これまでの開発許可の基準は守らなければならない。安全性という面はそこで担保されている。

■優良田園住宅は農業をやりたい人を救えるのではないか。

- ・久留米市では線引きしているが、周辺町は未線引き又は都市計画区域外である。そういうところでは線引き外の方が地価が高いなど、地価の逆転現象が大きくなっている。すると、農業が成り立たなくなった農家からは「調整区域を外してくれ」という要望も出てくる。
- ・そこで、未線引きより少しきつい都市計画が必要になるのではないか。例えば線引きを検討している志摩町などでは、線引きした上で運用しやすい地区計画を定めることによって、その新しいタイプを示すことができるかも知れない。
- ・農業をやっていく人も減り、農業基盤が弱くなっていく中、治水面など都市の安全も考えると、都市周辺で農業をやっていこうという人たちを救える制度として、優良田園住宅は使えるかも知れない。

(伊藤 聡)

空店舗活用が商店街の流れを変えるか？

— 通りからにぎわいのある人だまりへ —

私がよく訪れる、唐津市の駅前の中央商店街では、郊外型大型店舗の進出などによる空き店舗の増加が目立ち、日曜日にはほとんどの店が閉まっているところもある。今まで中央商店街では、土曜夜市が行われたり、商店街用のショッピングカートを外に設置したり、無料駐車券を配布したり、お客さんの引き込みに力を入れていたようだった。しかし、私がみたところ、相変わらず人通りが少ないようだ。ところが、9月10日から実施されている、「akitenプロジェクト」(空店舗を活用した試み)はこれまでの中央商店街の流れを変えそうな気配を感じたので紹介したいと思う。

■食料品など消費者が日常的に訪れる商店が少ない

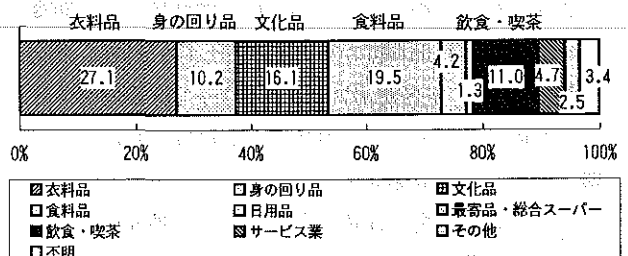
少し中央商店街について説明すると、中央商店街は、食料品関係の店舗が約2割、飲食、喫茶店が約1割、その他は、眼鏡、靴、洋服、陶器などの店舗で構成されている。食料品関係の中には和洋菓子店なども含まれるので、実際には、日常的にお客さんが訪れ、買い物をする生鮮食品などの店は少なく、食料品から雑貨まで揃う郊外大型店舗に人が流れていってしまっているようだ。また、その弊害として現在では、約250店舗ある商店中、約1割が空店舗となっている。

そういった中で、商店街に人をよぶために、空き店舗を活用した「akitenプロジェクト」が国、県、市、商工会の補助を受け、地元で進められるようになった。

■継続性のある事業を行うために有限会社をつくった

「akitenプロジェクト」について地元の方に話を伺っ

中央商店街の業種構成 (唐津市資料・平成2年度)



中央商店街通行量調査 (唐津市資料)

	平成4年	平成8年	平成9年
平日	62,904	57,258	50,108
休日	53,742	50,076	44,622



さかな屋さん
朝、市場から仕入れた色々な種類の新鮮な魚介類を安く売っている。

たので、概要を説明する。

- ・空店舗活用の事業は「akitenプロジェクト」と名付けられ、商店街空店舗対策モデル事業として国、県から3,500万円、市から250万円、商工会から250万円の補助がでている。
- ・補助金は主に、建物の修繕費、家賃、イベント費（オープニングセレモニーなど）、広告費、委員会費に使われている。
- ・その他の光熱費などは空店舗利用者の負担となっている。
- ・現在実際に活用している（予定も含む）のは、5店舗で、今後も増やしていきたい。
- ・店舗は、「さかな屋さん」（鮮魚店と飲食店がテナントとして入っている）、「自由工房」（陶芸教室）、「日曜雑貨の店」、また近々オープンする「えん屋」（唐津くんちのグッズを販売）まだ準備期間中の肉屋の女将さんグループで組織されている手作りのコロッケやハンバーグを販売する店である。
- ・さかな屋さんの運営については、継続性のある事業を目指し、補助期間がきれる来年以降に備え、商店街の店主ら26名が出資し、事業の企画・運営にあたる有限会社「まちづくり唐津」を設立した。

■さかな屋さんの評判は上々のよう。

さて、さかな屋さんの評判であるが、地元の方の話によると「僕はシャコが好きでスーパーでよく買うんだよ。スーパーだと1パック380円ぐらいなんだけど、あそこはその7～8倍の量で1,000円なんだよ。だから300円分だけ売ってもらったんだ。新鮮で種類も多いし、少しでも売ってくれるし、あそこはいいよ。」との



自由工房
会員さんは、女性がほとんど。本当に楽しそうに陶芸をしている。

ことだった。私自身さかな屋さんを訪れたが、確かに品数が多く、新鮮で安かった。また少しの量でも買うことができ、刺身などに切ってもらえ、サービスも良い。

まだ開店して1カ月足らずであるが、売上は平日でいたい35万円/日程度、日曜日は、客足が少ないが、徐々に増えており、好調なすべりだしとのことだった。

■会員が34人、自由で気楽なところがいい「自由工房」
陶芸教室を行っている自由工房も、現在34名の会員がおり、いつもにぎわっている。会員の半数以上は週3日以上工房にきて、長い時間陶芸に夢中になっているとのことだった。

自由工房のしくみだが、よくある陶芸教室とは少し違い、3,000円の会費を払えばいつでも自由に工房に来て好きな時間だけ陶芸をすることができるようになっている。また、水、土、日は学習日となっており、先生が指導してくれる。勿論その他の日でも、先生にわからないことを聞けば親切に教えてくれる。会員以外でも希望者は、体験だけなら無料、焼成まで行うなら実費で楽しむことができる。

■唐津ファンの勝手な意見を少し。

最後に唐津は大好きなまちなので、勝手な意見を少し。唐津は確かに都会の派手さはないが、文化的で落ち着きがあるよいまちだと思う。だからそういった雰囲気唐津を訪れたときにもっと簡単に感じる事ができ、おいしいものが食べられるところをもっとあったらよいのにと思っていた。akitenプロジェクトは、その第1段階として、おいしいもの（魚など）を買うことができ、食べられる場所ができた。文化的なもの（陶

芸体験)に触れることができる場所もできた。

しかし、唐津ファンの私としては、akitenがオープンしたことに安心しないで、お客さんのニーズ、反応をしっかり受けとめ、どんどん改善していった欲しいと思っている。また、商店街の方も「計画をたてるだけでなく、まずは行動をしなくてはいけない。悪いところはその都度改善していけばいい。」といった柔軟な姿勢でいるようだ。このまま唐津のまちづくりがよい方向に進み、唐津がもっと魅力的なまちになることを望んでいる。(七搦 かおり)

地元と密接に関わっている

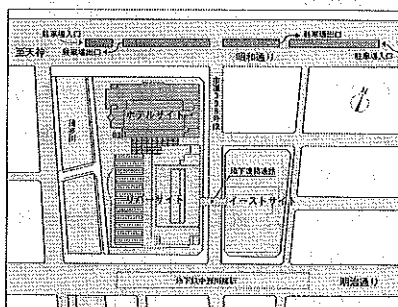
博多リバレイン

福岡市下川端地区再開発ビル建設工事現場見学会

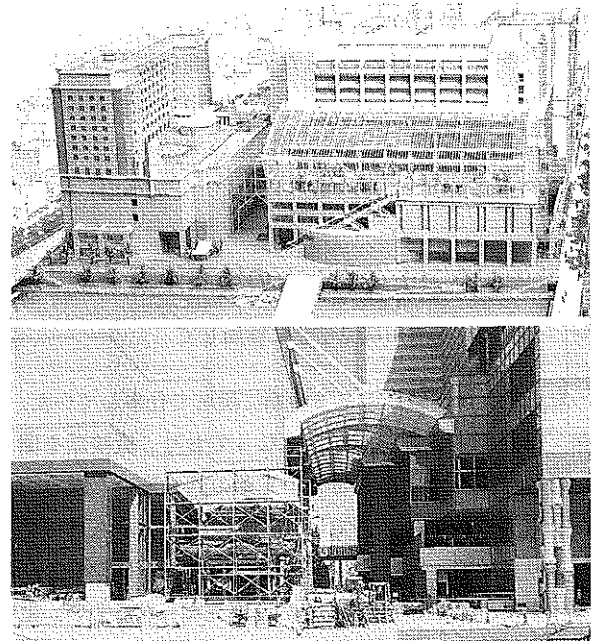
9月19日(土)、九州まちづくり会の特別企画で、現在建設中の下川端再開発地区の「博多リバレイン」を見学させて頂いた。今回は、九Qの会からも参加を募り、予想を大きく上回る応募があった。

博多リバレインは3つのエリアで構成されている。その3つとは、ホテルオークラ福岡が入る「ホテルサイト」、海外の有名ブランドを集めた『スーパーストリートシティ』と福岡アジア美術館等が入る「リバーサイト」、博多座等が入る「イーストサイト」である。

「リバーサイト」について私が気になったのは、12階に居住する地権者の意向であった。元々、ここに暮らしていた220軒の再開発事業が決定した後も20軒は下川端地区に絶対住み続けたいと言っていたが、最終的に11軒が入居する予定となった。住み続けたい最大の理由として挙げられるのが山笠である。リバレインのある下川端地区は山笠の「流れ」でいうと「大黒流」に属している。山笠の役員をしている以上、自分の属している「流れ」の地区内に、ぜひとも住み続けたいという思いからだろう。居住スペースは3~4LDKで70



3つの建物で構成されている



上 右がホテルサイト、左がリバーサイト。リバーサイトの最上階に住宅がある

下 アーケードの下が山笠の通るモール、その左側で社社の工事をしていた

~86㎡となっており、住宅のある12階まで専用エレベータがついている。住戸1戸につき1台分はリバレインの地下駐車場が確保されている。

私は今年、山笠に参加したこともあってこの地区と山笠の関係を興味深く聞かせていただいた。

この地区が山笠の大黒流に属すると書いたが、リバレインの中も山笠の走る順路になっている。その順路になっているのは、写真のモール(半円の屋根がかかっている部分)で、今年の山笠の期間、山笠が通るときは工事がストップし、神様を上から見下ろしてはいけないという配慮から、作業用に掛けられた梯子もクレーンでもち上げられた。

リバレインの建設前は、この地区には山笠期間中に、大黒流の「飾り山」が飾られていた。リバレイン完成後、再び、写真のモール内に飾られるだろうということだった。

また、この再開発地区内には昔から鏡山神社という神社があった。リバレイン建設後もそれまで神社のあった場所に神社を残す方向で計画が進められた。工事中も神社が無くなってしまいうけではなく、約500m南にある櫛田神社に一次的に奉られている。見学会の時には、完成まであと少しの「新生」鏡山神社が姿を現していた。残った神社は「カタチ」だけでなく、地下

にはちゃんと社務所もあるそうだ。

アーケード商店街であった下川端商店街とは様相がガラリと変わってしまうが、そんな中でも昔からの地域に根ざした歴史や文化を受け継いでいるところに面白さを感じた。
(小田 好一)

ホントのホントの地底体験

黒川坑見学会に参加して

私の祖父は、戦後のある時期に炭坑で仕事していた。祖父は私が生まれる前に亡くなっており、直接話を聞いたわけではないが、母方の兄弟の話を聞いた限りでは、坑夫の仕事は一言でいうと、炭塵で鼻水も真っ黒になり、始終、落盤やガス爆発の恐怖におびやかされる一方で、収入だけは高額という商売だったらしい。生前の祖父は、いわゆる炭坑夫気質を旺盛に持つ男だったらしいが、孫の私は炭坑体験はおろか石炭に触ったこともない。

そんな折、8月上旬に新聞をめくっていると、九州通産局の石炭鉱山技術試験センターが閉所するので、一般見学を受け入れているという記事が載っていた。早速、見学の申込をして、8月18日に事務所の連中4人連れて参加した。場所は福岡県稚井町にある黒川坑である。

■まず粉塵爆発実験とガス爆発実験に驚く

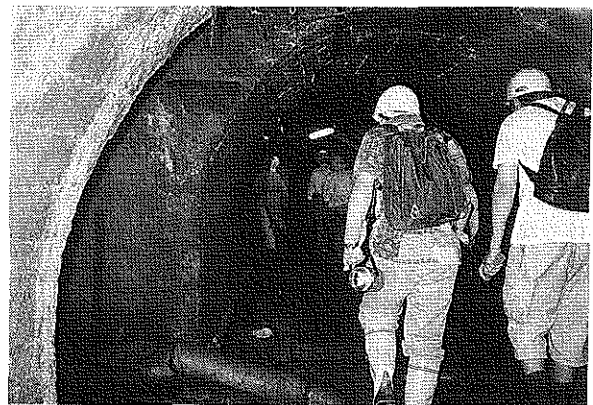
申込受け入れ許可の書類には、予め長靴、長袖シャツ、タオル、懐中電灯の必携とあった。一応、その通りの格好に身を固めるが4人ともさっぱり似合わない。

我々が見学した当日は、地域公団の方や一般市民を含め、約30名ほどの参加があった。

施設では、はじめに係員の操作で、爆発実験のシミュレーションを見学することになった。爆発は2種類で、炭塵爆発（三池三川坑の事故などはこれ）とガス燃焼・爆発（夕張坑の事故などがこれ）である。

炭塵爆発は石炭の飛沫と空気の微妙な調合でできた燃焼ガスがちょっとした火花などで引火して発生する。戦後最大の犠牲者を出した三池三川坑では、トロッコから発生したわずかな火花が次々に引火して大惨事につながった。

その日の実験では2kgの炭塵を圧縮空気で一瞬攪拌し、バーナーで引火して爆発させた。当日は風が強く、うまくいかなかったようだが、それでも巨大な火の



これから地底世界へLET'S GO!

玉は立ち上り、我々は気分的に圧倒された。

つづいて屋内でガス燃焼・爆発実験の見学。メタンガスはふしぎなもので、空気中で一定の濃度を占める場合、また、よどんだ空間に溜まる場合など、ある条件下では大いに爆発力が増す。この日行われた実験では、ミニチュアの坑道の中を火が走っていく様子がはっきりと見えた。

当日の回りの参加者は「こんなものに焼かれたら坑道の中では逃げ場はないよな」とか「実物ならもっとスゴイだろうな」とか、ささやきあっている。

■わが身が閉所恐怖症であることに気づいた坑内体験

つづいて坑内見学になった。研究所の所員の案内で、ヘルメットをかぶった完全武装で2列縦隊で坑道を闇へ闇へと近づいていく。思ったよりも高さはあるが、気温は徐々に下がっていく。

心なしか皆さん無言である。「ここは以前、爆発物の適合性を実験していた場所です」と案内の方が語る。坑道は1片（地底6M）、2片（地底13M）からなっている。新聞には2片に「炭層が見える」と紹介してあったが、その2片は既に水没して立ち入り禁止である。研究所の閉所が決まり、排水ポンプを止めた瞬間から、坑道は人間の世界からもとの地底の世界に戻ろうとしている。

斜めに走った坑道を降りていくとき、情けない話だが不意に足がふるえた。日光の届かない場所で、天井を塞がれた空間に自分があって……と想像するともういけない。平静を装っているものの、にわかに小便がしたくなり、早く日光が見たいと思うようになった。恐ろしさをまぎらわせるために、近くにいた研究所の所員に「この枕木はどんな素材ですか?」とか「ポンプを全部止めたらどうなりますか?」などと質問をした。

ようやく暗闇から開放されて（暗闇といっても蛍光灯が輝き坑内は実験用に明るくしている）上に上がった時はホッとした。

■9月いっぱい80年余の歴史に終止符

この研究所の坑口は9月いっぱいには閉鎖された。大正4年の設立以来、国内の炭坑事故の分析と予防に関する研究を80年にわたって手掛けてきた。しかし、石炭の国内産炭がほぼゼロになった今、その役割は果たしたということであろう。

私は祖父の働いていた環境うんぬんより、炭坑に潜る体験自体を目的に軽い気持ちで入ったのだが、あの重々しい空気は何ともいえないものであった。今回、見学したのは実験坑のほんの一部であったが、その他、400M坑道や230M坑道などあって、小さい頃読んだジュール・ベルヌの「地底探検」ではないが、体験学習や精神修養の場として使えそうな気がした。

（尾崎 正利）

まつりの企画はむずかしい!?

八女福島の町屋まつり

9月21日～23日に福岡県の八女市で町屋まつりが開かれた。八女市福島は古くから八女茶、提灯、仏壇、榎蠟などで栄えた町で、今でも古い町並みが残る地区である。年に一度この期間中には、江戸時代から受け継がれ、国指定重要無形民俗文化財に指定されている「八女福島の灯籠人形」の公演もあり、まつりの目玉となっている。

9月の初め頃、町屋まつりのイベントの企画に携わっていらっしゃるメンバーの方にお話をお伺いする機会があった。そのイベントとは、着物で町屋まつりに来場した方の希望があれば、無料で舞子さんに変身し人力車に乗って街並みを巡るというものだった。（ただし、舞子さんに変身するのはまつりの最終日（9/23、祝日）のみで、他の日は着物のままで人力車にのるサービスであった。）

町屋まつりは平成6年から行われているが、このイベントは、今年初のものなので、平日はお客さんを集めるのに苦戦したそう。

しかし、八女福島の町並みを「着物の似合う町並み」と銘打って市の公報を通じて舞子姿になりたい人を募集したところ30名もの応募があったそう。その中か



瓦屋根をバックに、人力車の舞子さん

ら6名のかわいらしい舞子さんが23日のまつり最終日に福島のまちを巡っていた。舞子さん達は、衣装、かつらを装着、化粧して、町並みを人力車で走り、お茶会に参加して、戻ってくる。9月とはいえ、まだ暑かったのでスタッフも舞子さんも結構大変だったようだが、見ている私は楽しませてもらった。元々、この案は男性の出した案で、舞子になるためにどれだけの準備が必要で、下着をどうするかなど男性には分からない問題があったそう。舞子に変身することを簡単に考えていたそうだが、奥様方など女性の指摘で、大変であることに気付いたという。やはり、女性のお客さんをターゲットにした企画ならば、女性からの助言が不可欠なようだ。

まつりの期間中、走っていたのは3台の人力車だが、地元で人力車があったわけではなく、2台は福岡市の活動グループにお願いし、残る1台は地元でこの日のために購入したもので、今後、まつりの期間以外での活用を考えているらしい。八女の観光スポットをつなぎ、スポット間を人力車でまわる観光のコースの設定をすることや、衣装を貸出して、町屋の前で記念撮影のサービスをするなど活用方法はいろいろあると思う。どんな人力車サービスになるか楽しみである

（小田 好一）



あなたの家を節水型住宅にしませんか

— 福岡県節水型住宅 —

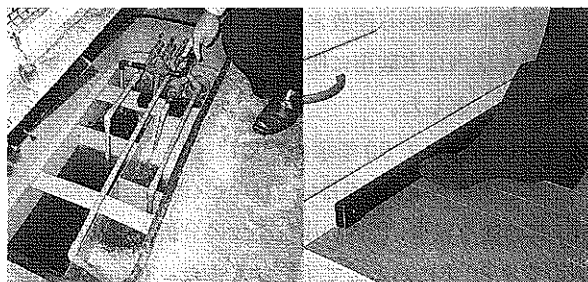
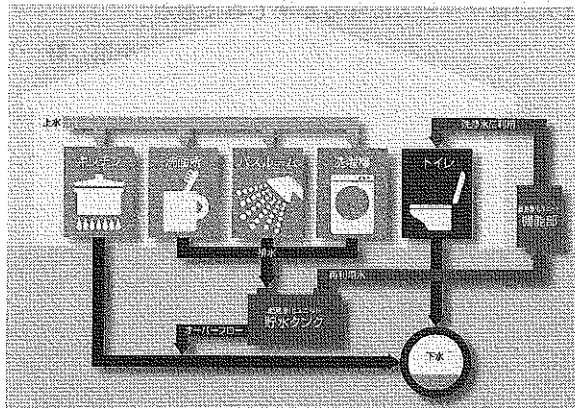
全国の中でも大渇水経験などで節水意識の高い福岡ですが、平成6～7年の大渇水後、福岡県では水の有効利用システムを設置する節水型住宅の開発・普及に取り組んでいます。当社でも節水型住宅の普及促進のお手伝いを一部させていただいていますが、平成7年に行われた福岡県による「住宅における水の有効利用システム」という提案募集のなかで、研究開発部門優秀提案に選ばれた4社（ソーラーシステム㈱、昭和鉄工㈱、東陶機器九州支社㈱、㈱INAX）のシステムが製品として出揃いました。このうちの一つである東陶機器システムが導入された実際の住宅をみてきました。東陶の川村さんの案内で篠栗町にある住宅に行きました。

●再利用だけでなく、使用量も減らす

浴室、洗面台、洗濯機の各排水を外部に設置した貯水タンクから、簡易浄化ユニット（200ℓ／日）で浄化された再利用水を貯水タンク内（250ℓ）に溜め、トイレで使用する水として再利用され、一日20回程度のトイレの使用が想定されています。

節水型というのは、これら排水の再利用だけでなく、当然上水使用量も軽減する必要があります。そのため、洗面台、台所の上水利用には、通常の水栓だけでなくつま先で蹴って栓の開閉を行えるフットシステムや浴室シャワーには、取っ手のボタンでオン・オフができるクリックシステムなども備え付けられていました。とくに、フットシステムは便利なようで、無意識のうちに足が出てくるようになったとこの奥さんは言われていました。このシステム導入でどのくらい水道光

節水住宅システムのイメージ（TOTO）



再利用水の貯水タンク

フットシステム

熱費が減るかというのも課題の一つですが、この家は2ヶ月しか経っていないのでまだはっきりしないようではありましたが、大体月1000円位の経費節減の見込みのようでした。

●金融公庫の融資枠の拡大と補助

4つの各システムとも25%以上（メーカーによっても最大50%）の節水効果があり、システムを設置する場合には金融公庫の融資枠の拡大が適用されると同時に、福岡県の補助金が受けられます。

システムの導入コストは、各社によって異なりますが、東陶機器の場合は、大体70万円ぐらいのようです。ただし、住宅を新築するときの価格であり、まだシステム導入間もないため、開発部署などの定期的な点検も必要のため、現在のところ県内の住宅への導入に限られているそうです。既存の住宅へのシステム設置も可能ですが、その場合配管等のコストが別途必要になります。昨今の資源環境保全の重要性を思うと、21世紀には、こういう節水型住宅システムは常識となり、逆にこういうシステムを取り入れていない住宅の方が肩身が狭くなるのではないとも思われます。またそうなるためには、共同住宅での水再利用システムの普及が一つのポイントとなるのではないのでしょうか。

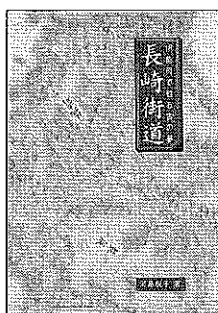
お問い合わせ等は福岡県住宅課計画係で受け付けています。（山辺 真一、伊藤 聡）

— 長崎街道が今に生きる —

歴史資源を生かして長続きする活動のベースに

さる8月27日に「九州まちづくり会」の第3回会合が天神の警固神社で開催された。テーマは「知恵溜まり、人溜まりを目指して地域連携をつくる」で、古賀方子さん（長崎街道まちづくり推進協議会）に活動の実践報告をお願いすることに。

もともとこの話は、同協議会のメンバーである河島



長崎街道
〜伊能図で甦る古の夢〜

河島 悦子 著

悦子さんの著書「長崎街道〜伊能図で甦る古の夢」という本が仲間うちで評判だったので、活動に携わる方にぜひ話をお願いしたいというのがきっかけである。

古賀さんが活動に関わった動機は「街道を見直すといつて、史跡調査の延長のような話ばかりだったので、街道につながる歴史や文化、交流など今の時代の地域間交流に結びつく活動にしたかったから」という。「少数のメンバーの想い入れだけ」（古賀さんのお話から）でスタートし、協議会は手弁当の活動ながら、地道に街々に働きかけてきたことが、地域で注目されるようになり、さらに通産、郵政などの省庁にも注目されるようになった。

話を聞いて、今の時代に結びつくような歴史資源の生かしがたが、長続きし、無理のない地域づくりのベースになるのかもしれないと思った。

参加者には唐津街道のことを勉強中という方の参加もあった。結構、熱心に研究をしているというが、街道をテーマにするのは、地域単独で孤軍奮闘ではないという意味で、とっつきやすいのだろうか。

（尾崎 正利）

蕎麦の花を見ながら考えた

〜 百姓志願願末記・糸乗貞喜 〜

〈いきさつ〉

5月下旬に「農業やりたいんなら、畑を貸しましょうか」と言われ、「貸していただけますか」と返事をし、農業をやることになった。この国では、農業をすることは、業として、その収入で生活するという建前が要求される。その基準が五反（1500坪）となっているので、借りるという限り5反耕作するということになる。とはいえ、「本当にそれで生活するのか？ちゃんと別に収入はあるんでしょな」と念を押される。

「昨年、私の友人が、農地を五反買って農業を始めようとした時、農地委員会からきびしい質問を受けた。その意味は、農業をやるといって買っておきながら、ゴミ棄て場にされたりすると困るからでもある。彼の場合は「そんなに手間のいる農業にせず、果樹園にして、都市の人に貸す。本業として公認会計士の仕事で暮らせるので、悪いことにはしない」と言って信用を得たということである。

〈サツマイモ〉

話をもとにもどすことにする。5月30日に畑を見て、帰りに、陶友（知的障害者の人たちが焼き物をやっている授産施設）に寄ったところ、「梅雨のうちに植えたら、秋にサツマイモ掘りができる」と言われ、その気になった。私の農業の手始めはサツマイモである。

急遽サツマイモの苗を頼むことにしたが、五反もあるので「一反ぐらいいは作らない」と言われ、2,500本の苗が来た（一反なら2,500本ということ）。

6月13日、陶友や当所員、友人などの助力を得て11人で2,500本のサツマイモ植え完了。植えたあとを見渡して、これ全部にサツマイモができたかどうか処分すればいいのかな、と不安になった。この時、中腰で張り切って仕事をしたので、ギックリ腰の再発になってしまった。この後2週間ぐらい出張が多く、地獄の苦しみを味わう。

腰の状態が少しよくなったので、7月18日に畑の近くへ移転（畑まで2.5キロ）。

〈農業の国際化〉

引っ越してからは、毎週土・日は草取りを始めた。

しかし、1日しかできない週もあったり、ギックリ腰をかばっているのでは5〜6時間ぐらしかできず、遂に草の勢いに追い越されてしまった。

最近の雑草は、アメリカから輸入したギョウヒ（牛の堆肥）の中にあつた種子からのものも多いということで異国にやってくる力強さを持っているので、生い茂る迫力が違い、草取りは追いつかなかった。そもそも最近の農業では、草取りという作業工程はないのかもしれない。

「やっぱりマルチをした方がよかったですね」と言われた。マルチとは、苗だけを出して、黒いビニールを敷き詰めることを言う。私の考えは、サツマイモの蔓が伸びたとき、ところどころで根を下す邪魔になるかもしれないと思い、ビニールは敷かなかった。しかし、



サツマイモを植え終わったところ

今から考えると、国際的な迫力で、ギックリ腰人間にせまってくる雑草相手ということなら、はじめから日本のビニール開発技術を誇示すべきであった（ビニロンは日本で開発された）。

〈蕎麦を蒔きながら現代農業論〉

サツマイモで1.5反は埋まったが、あと3.5反が残っている。

「またしても軽いノリの言葉にだまされた。『ソバなんかいいんじゃないの』という事務所での声。蕎麦の種を注文してもらった。畝をおこしてもらって蕎麦まきというものをした。誠に申し訳ないが、何から何まで農地を借りた地主の世話になっている。『蕎麦を蒔くぐらい自分でしますから』といって、事務所員の助っ人を得て、『ソバなんて簡単だよ、昔、おふくろに『ソバというものは、種を蒔いて、足で土をかけておけば、60日後にカマを持って刈りにいけばいい』と言われてたよ』などと言って、軽い気分でやっていた。

そこへ地元のOさんがやって来て、しばらく種が入っていた袋の注意書を読んでいた。「糸乗さん、もっと土をかぶせた方がいいんじゃないですか」、「エッ!」、「ここに5~6cmの覆土をせよ、と書いてありますよ」

それまで、「ソバというものは、バラバラ蒔いて、適当に土をかけるだけでいいんだから…」など、40年前の世迷い言をいっていた私は呆気にとられた。早い話が、今どきの農業をやる人間というものは、私のような昔型の適当人間ではだめだということである。急いで袋の注意書を見た。

この蕎麦の種は「信州大学農学部資源開発学研究室」の「信州大そば」というブランドである。「強い!! 大粒で多収!! 作り易い!!」という品種であった。種子の袋を破ってみたときから、やたらと「大粒で揃いが

いい種子だな」と思っていた。以下に説明を抜粋する。

- ・覆土は倒状を防ぐためにも5~6cmとして下さい。
- ・早刈りはしない。脱粒はしないので、十分実るまでおいておく。（風が吹いて実が落ちてしまったなどということは、今ではないらしい）
- ・信州大そばは、霜に当たって葉が落ち実が黒くなるまでおいておく。（霜などが、まず降ることはない九州で蒔いているのだが、いいのかな）
- ・信州大そばは在来種と異なり、毎年種子を更新しないと多収は得られません。（これはヒョットするとF1ではないのか。一代雑種の多収種子が、ついに蕎麦みたいなものにまでやってきているのか）

この袋の特徴を読んで、私の悟ったことは、今や農業をやる人間は、物知り癖のある人でなければならんということである。農業は私のようなアバウト人間ではなく、十分説明書を読み、知的判断力を備えている人のやる、知的な仕事なのである。それは種子のみではなく、苗はもちろん、各種の機械の操作も必要だ。今や農業は、各種の加工業などを比べても、はるかに資本装備率が高い。

現代農業は工業と同じものと考えられる。

工業の仕組みは、大量に同一企画のものを作ることに向いている。そして「農業でメシを喰う」ためには、一斉に工業化していった。

私たちは農・漁業も含めて工業化社会の真っ直中に住んでいる。しかし「脱工業食品」を食べたい人々も増えている。ええ歳をとってしまった私が脱工業型農業をやれるかどうかかわからないが、無理をせずにやってみたいと思っている。

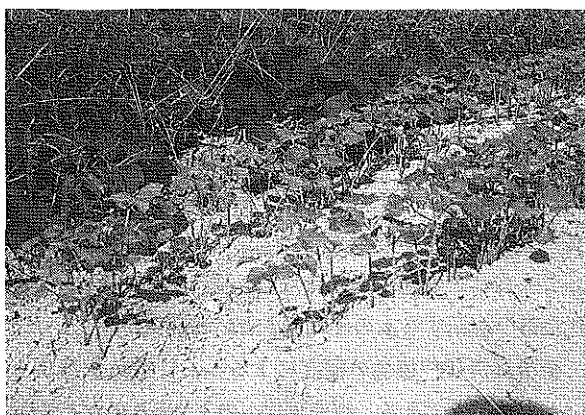
春日井市の津端先生は、「60才からでは遅すぎる」と言っておられる。本当にそう思う。50才までに、川勝平太氏の言うところの、「家と庭」を持った暮らしを始める人達が増えることが望まれる。

都心部のマンション暮らしの人々にも、郊外部の農家と連携して、小さい「庭」をもつような仕組みをつくりたい。その支援もしてみたいと思っている。

〈私のユメ “土のついた・木のきいた生活”〉

8月29、30日に蕎麦を蒔いた。5~6cm覆土をしたのに、5日後には一斉に3cmぐらいに生え揃っていた。今の品種改良された、粒の揃った種子は、ほとんどが発芽するのだということも分かった。

次に9月26日に秋ジャガイモを共同で1反ほど植え



蕎麦をまいてから5日目、元気に芽を出している

た。これでも5反全部はうまっていない。5反の畑は巨大である。このやり方では無理なように思う。

もともと私の考えていた脱工業型農業は、品種が限定された農業ではないが、今はスタートしかけている段階だから仕方ない。

私の空想を以下に述べる。

- ・裏に雑木林がある。
- ・それに続いて果樹の畑があり、そこに雑多な果樹の木が植えられている。例えば、茱萸の木、石榴、柚、みかん、夏蜜柑、橙、柿、林檎、梨（20世紀にかぎると思うが、あの堅い山梨もあっていいかな）、葡萄、桃、梅、栗などなど、前後の脈略もなく植えたい。
- ・虫よけのために、樟の木もところどころにいるかもしれない。いや、ひょっとして、虫よけの木があったら、虫が来なくなるので果樹のためによくないのかもしれない。
- ・果樹の下には韭、大蒜、辣蓼がいいかな。
- ・果樹の隣に花を少しと、野菜畑が少々。
- ・いずれ1反ぐらい田を作って、自分で食べる。
- ・できれば山羊がいて（牛は大変すぎる）、庭に鶏が

いる風景の中で暮らしたい。

なかなか実現しそうでない夢だが、1歩でも近づこうというのが、今回の畑づくりであった。こんなことを思っていたら、8月頃に秋山さんの本と出会った。ソ連のロケットに乗って宇宙へ飛んだジャーナリストである。この人は福島県の郡山の東の方の山手（標高500～600m）で上記のような農業をやっておられる。今年の9月の豪雨の頃、気になって仕方がなかった。

〈なぜ農業をやりたいのか〉

最初に農地さがしを始めたのが15年ぐらい前で、京



蕎麦をまいてから28日目、この風景を見て一句詠んでみた

都、大阪から近い亀岡、丹波篠山方面であった。九州との縁ができて、福岡と京都・大阪を行き来し始めた頃には、岡山県と兵庫県の境の町をねらった。丁度その頃そこでの仕事があったからでもあり、九州と関西の中間ということでもあった。

ダニアレルギーにやられて、アトピー性皮膚炎にかり、体調をくずしたため、掛け持ちはできなくなって、農地さがしが中断した。今回は、ご好意によって長年のユメの手掛かりを得られることになった。

一応、百姓志願の動機を述べねばならない。

伸び盛る 蕎麦の花ごしに彼岸花
百姓志願願末記 一糸乗貞喜

この短歌のようなものは、蕎麦を蒔いて丁度1ヶ月ぐらいたった頃、挨拶状に書いたもの。いろいろ驚きながら、農作業の真似ごとをしているが、まずはその動機から。

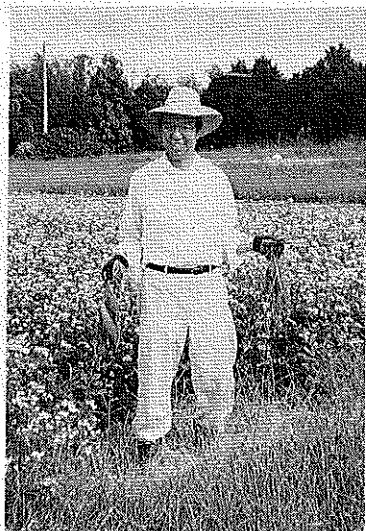
〈百姓志願の動機〉

一口に言うと、事に当たると、私はオドオドしたり、慌てたりするに違いないという不安が根底にある。

こういう話がある。例えば、大地震が起こったとか、原子力発電所（に限ったことではないが）などの事故があったりすると、えらく割り切った言い方をする人がいる。「どうせ事故になったら、個人でじたばたしても仕方ない。皆一緒なんだからあきらめなきゃあ」という言い方である。阪神大震災の時、本当に沢山の人が、落ち着いて行動された。しかし、現実にはじたばたする人はいる。

太平洋戦争に敗れた1945年8月15日には、私は国民学校3年生になっていた。当時は食糧難で、私も大根

掘りたての
サツマイモ



めしは言うに及ばず、山へ行って米と一緒に炊き込む木の葉っぱを取ってくるのを手伝ったりしていた。もちろん農作業は日課であった。1943年頃から戦後の1947年頃まで、日本中がじたばたしていた。

オイルショック時のトイレトペーパー騒動もそう。沢山の人がじたばたしていた。

ところが、人類の歴史の中で、現代ほど食糧難の時代はないのではないかと考えている。というより飢えている人の数が多い時代はないと思う。そしてそれは毎日着実に増えていて、それが減るということと言う人は1人もいない。

これらの認識が百姓志願の動機となっている。お金があつたり、腕力があつたりすると食料を手に入れることはできるだろうが、その財力や腕力のない私としては、日頃から少しでも食べ物の近くにいたい。

〈世代会計と今日楽主義〉

早朝、農地に行く途中、いつも缶入り緑茶を買うことにしていた。コインを入れると出てくるのである。しかし、農業はこうはいかない。蕎麦みたいに早い作物でも、花が咲くまでに30日近くかかる。40日ぐらいで青い実をつけているが、刈り取れるまでには70日ぐらいかかるのである。粉にして蕎麦打ちを楽しむには、また、それだけ手間がかかる。

最近の新聞やテレビのニュースを見ていると腹の立つことばかりである。毎日々々、自分達は「今日楽」をして、次世代にツケを回すことばかり考えている。

もともと人類というものは、少なくとも51%以上が、蓄積型の暮らしをしてきたから今日があるのだと思う。

つまり「明日楽型」が51%以上いたということだ。ところが今日の日本をみると、1億2千万総「今日楽主義」で踊っている。子や孫の足に嚙りついて、口から血がたれ下がっているように見える。私はエゴイストだから、せめて自分だけでも子孫の足を嚙りたくないで、食べ物に近くにいたいのである。

こんなことを考えていたら「選択」の10月号に「“世代会計”が示す日本の不均衡」という文章が出ていた。

全米経済研究協会の研究によると、日本が一番ひどいということである。将来世代への1人当りのツケを示す不均衡は以下の通りである。

	1995年 生まれ	これから生まれ る将来世代
・日 本	14.3万ドル	38.6万ドル
・アメリカ	8.6万ドル	13.0万ドル

この原因は、人口が減少していく中で、高齢化の速度が早いからだ。仮に人口構成が今と変わらないとしたら、ドイツ、アメリカ、カナダ、北欧3国などは、95年生まれの世代より将来世代の方が負担が少なくなるのに、日本では42%重くなるとされている。

年金制度ができた頃、「積立式の年金なんて無意味だ。賦課式でいいんだ」と言われて、何だか釈然としなかったが、やっぱり今のような付け回しがきくはずがない。

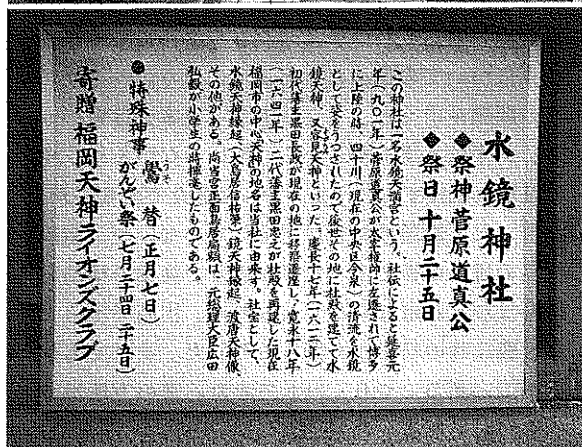
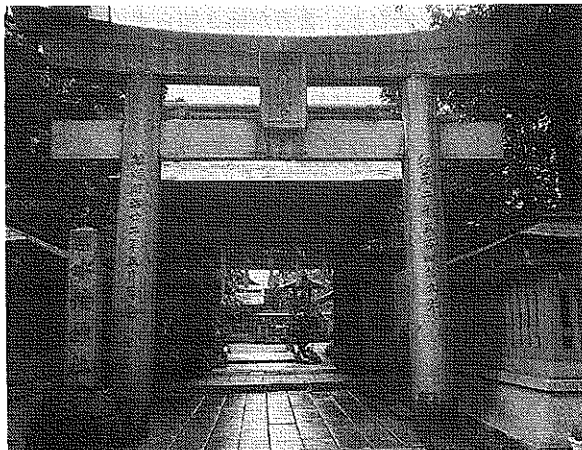
吸血鬼になりたくない人は、「自給自足の農業をやろう」と呼びかけたい気分である。（糸乗 貞喜）

事務所近辺の天神・博多散歩

水鏡天満宮の扁額

私たちの事務所は天神1丁目で、隣は「天神」の地名の由緒となった水鏡天満宮がある。その天満宮の間には、天満宮横丁という飲み屋通りがあって、日頃から極めて便利にしている。人によっては「ションベン横丁」等と下品な呼び方（親しみを込めた呼び方）をする人もいる。

この横丁の特徴は「新鮮なものが安く食べられる」ことにつきる。夏から秋にかけては、アゴサシ（飛び魚の刺身）がおいしかった。これから冬にかけて、サバ、アジ、アナゴ、カワハギなどの新鮮なものが、リーズナブルな値で食べられる。



上は広田弘毅が揮毫した扁額
下は水鏡天満宮の縁起

つつい食べものの話になったが、本稿は見出しに書いたように、扁額のいわれを述べるのが目的でもある。写真は天満宮の正面だが、その鳥居の中央に扁額がかかっている。この「天満宮」という字は、広田弘毅が小学生の頃に揮毫したものである。その部分を拡大した写真がないのは残念だが、説明は神社の縁起を書いた看板にある。

ついでに広田弘毅(1878~1948年)のことをいうと、少年時代から玄洋社の影響を受けていた。1936年の2.26事件後首相となり、外相も兼ねた。それ以後も戦時中は重要な役割を果たした。戦後は南京大虐殺事件の外交責任を問われ、文官中唯一人絞首刑にあった。

広田弘毅のことについては、城山三郎の小説がある。

(澤谷 真紀子)



だったん疾風録
上巻・下巻

司馬遼太郎著

中公文庫

地域の仕事をする場合、誰かがその土地のことを噛み砕いて紹介してくれると、非常に頭の中の整理がしやすい。小説などがあれば非常に助かる。

ちょうど平戸の仕事をはじめたとき、何かないかと調べていると、ちょうど当社の上司が買ったばかりでこの本を持っているというので、助かったとばかりに強引に借りて、そのまま手元に置いている。

平戸というところは、ある時期まで、海洋交易国家として身をたててきた長い歴史をもっている。近年になって、盛んに言われだしている国際化とかアジアとの交流など、すでに平戸がはるか昔に大いにやっていた。この本は平戸藩にあった架空の人物を通じて、17世紀初頭における、平戸の海洋国家としての繁栄、平戸人と漢人、朝鮮人、だったん(タタール)人の駆け引きや交流を眺めてみたものである。

物語では新興国家・清朝が台頭していく様子がえがかがれる一方で、若かりし頃の鄭成功(近松門左衛門の「国性爺合戦」のモチーフとなった人物、明朝末期に台湾を統一に導いた)も登場したりして、当時、鎖国を始めたばかりの日本の外がどんな様子だったのか大づかみすることができる。

海洋交流で結ばれた地域間交流に注目し、興味をもって掘り下げていくと、平戸のルーツを単に日本の端っことして見るのではなく、国内外の海上交易で結ばれた地域、あるいは水軍や倭寇と関係のある地域との交流など、広いスケールでとらえてみたいと思うようになった。

これを、さらに本気で掘り下げていくと学会ができるのではないかとウチの中には本気で考えている人が何人かいる。松浦(まつら)のクニで、鯨でも食べながら、様々なルーツをもつ方々で、知的な交流活動が再びできるようになればと最近とみに思っている。

(尾崎 正利)



「山羊と暮らした」

重松 博昭 著

葦 書 房

この本は、著者が生きるための実感を獲得するため大学を中退し、あまり縁のない山田市に住みつき、自然と動物をこよなく愛し、戦った最初の約8年間の体験記である。

5月の中頃、自宅に一枚の葉書が届いていた。それは著者の奥さんからの便りで「主人が一生に一冊しか書けないものを書きましたので、是非読んで感想を聞かせて下さい。」という内容のものであった。私の高校時代の友人が奥さんと知り合いであったという縁だけで10年程前に一度自宅におじゃましたことがあった。当時の記憶としては、傾斜した大地に手作りの家屋が建ち、一般的な農家というより開墾者の家といったイメージであった。とにかく私はすぐ書店で本を買って求め、読みはじめたら著者の自然をみる観察表現の巧みさ（体験からしかできない素直な表現）と自然や動物との戦いのすさまじさというか、滑稽でもある体験談に引き込まれ、一気に読破してしまった。

動物との戦いでは、養鶏を思い立ったときの雛鳥を襲うイタチとの戦い、養蜂業を始めたころの蜂との戦い、獰猛な雄鶏「ブラックサターン」との戦いなど、多くの激戦記が綴られている。

また、この本の中で著者が長女の小学校入学を機に、日本の学校教育のあり方にひっかかり、自分たちの理想の学校づくりを目指した話は特に印象深いものであった。著者は夢の学校づくりのため、土地探しや教育委員会への説得などの行動を起こすのである。しかし、いざ移住となると仲間となる人々もそれぞれの生活があり、本人も今まで築いてきた生活を簡単に捨て去る訳にはいかず、学校づくりを思案していたころに自宅が全焼する。このときに仲間や知り合いの方々と新たな家づくりのための共同作業や暖かな支援を受けることによって、「理想の学校という“もうひとつの村”」は、はるか彼方にあるのではなく、“今、ここにある”ということに気づくのである。

この体験記を読むと、著者が怖さ知らずの農業素人であったこと、それと何か生きていることの実感を得たいといういい知れぬ情熱と若さがあったからこそ、実現できたことであろうと思う。

編集後記

前号に「誰が農村地域を支えるのか」という話をのせ、その話を建築学会の農村計画部会でさせていただいた。その時、「そんな心配はいらない。年齢層は少し違っても、ドンドン農村への移住が進んでいる」という指摘をうけた。そのことを聞きながら、20年ぐら前に話し合っていたことを思い出した。それはオイルショック後の日本の先行きについての議論だったように思う。一方が将来の問題を言うと、もう一方が「日本人は賢いから、いずれうまくやるから心配いらないんだ。その証拠に戦後ずっとうまくやってきたではないか」と言った。議論の結末は記憶していないが、繊維製品の貿易摩擦で中小企業が困り、産業の構造転換をはからねばならなくなったり、円高で困ったり、農産物の自由化で困ったりした。それでも何とか国内調整でやりくりしてきた。その方法はツケまわしである。花見酒の落語である。

その後我々は、バブルに突入した。そして「いずれ景気もよくなるから」という多数意見で心配もせず放置してきた。その結果、国民の税金を投入して銀行を支える話となっている。それも「税金で買った銀行株は必ず値上がりして、国民は結局儲けもよくなる」という話らしい。「楽天主義万歳」の世の中で、本当に楽天していいのかな。ツケの先は自分の子供や孫ということでもいいのかな。

(い)

よかネット NO.36 1998. 11

(編集・発行)

九州地域計画研究所

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130